

## 質疑応答

○司会 これまでの三つのお話を伺ってまいりまして、九頭竜川をめぐるテーマである「つながり」をひとまず総括してみたいと思います。

かつて九頭竜川はしばしば氾濫をもたらし、人々に対して荒々しい川として存在していました。人間同士の川とのつながりも、さまざまな社会的葛藤、対立を生むものでした。松浦先生のお話にありました、農業用水の利用と水運との葛藤、あるいは魚捕りとの葛藤ですね。また、川の水が増したときに、対岸の堰が破れるとこちら側の住民は大喜びするというような話も耳にします。川は日常的には対立、あるいは社会的葛藤そのものであったと位置付けることができるでしょう。

ですが、明治期以降に治水事業が進むとともに川の位置付けが大きく変わってきました。そういうなかで、従来みられた社会的葛藤が新たなかたちに変化してきたと捉えることができそうです。

そこで意識されてきたのが、環境を公益性、公共性、コモンズなどという言葉で捉える切り口です。もちろんそうした関わり方は中世以降から存在してきたものなのですが、その意味が変質するなかで、現在の人間と自然とのつながりが新しく認識されるようになってきたといえるでしょう。

では、皆さんの方からのご質問やご意見などいただければと思います。どなたか、いかがでしょうか。

○フロア1 福井県立大学の吉岡と申します。

どの先生のお話も非常に面白くて、お聞きしたいことが多々あるのですけれども、松浦先生にちょっとお尋ね申し上げたいのでございます。

九頭竜川と人と歴史のつながりを考えるときに、やはり九頭竜川の大堰掛の農業用水が、非常に大きな役割を果たしてきました。それは先生がご指摘されたことでございます。

昭和40年ごろから農業用水が護岸工事されるなかで、人とのつながりが薄くなっていく。再来年にかけてパイプライン工事が完成すると、農業用水と人の関わりがもっと大きく変化するのではないかと感じるのでございます。

昭和30年代と、これから平成30年ぐらいに向かっていく、この過渡期にあって、具体的にどういう水の問題を、われわれは語っていくべきか。そういうことについてのご提言がもしあれば、お聞きしたいと思うのですけれども。

○松浦 私に現代の問題について話すような能力はございませんけれども。確かに昭和30年代というのが、あらゆる本を読んでみましても、それまでにあった川舟とか筏とか、そういうものが全部なくなっています。大きな変化なのです。

それに対する変化というのは、先ほどまとめてくださいましたように、近代になって技術が進んできた段階で、新しい対立というか、コンフリクトというか、あつれきが変わったものになってくる。いまから農業用水がどうなってくるかというのは、ちょっと私は専門ではないから分かりませんけれども、やっぱり環境という問題が関わってくるでしょう。

ですが、3.11がありましたように、そして福井でも足羽川の氾濫がみられたように、水との付き合いについて、やはりわれわれは油断してはいけない。農業用水でも何でも目に見えなくなっているからこそ、やっぱり油断をする可能性もあるのではないかと。お答えになってしませんけれども、そういうことを考えています。

○フロア1 もう一つだけ、具体的に九頭竜川との関わりということとちょっとずれるのですけれども。この地の県立大にいる者として、松岡町の古墳のことについて、お聞きしたいのですけれども。

北陸電力の変電所のところに前遠方後円墳があったということを目にしたことがあるのですが、

よく調べても、その辺がよく分からないので、もし変電所の敷地にあったという古墳についてお聞かせいただければありがたいのですが。

○松浦 申し訳ありません。私は専門でございませんので。

○フロア2 私は地元の人間なんですけれども。いま、変電所のところとおっしゃいましたけれど、あれは場所が、私の子どものころの記憶では、もうちょっと芝原2丁目の泰遠寺山という山があった。そこから、今日は古墳の担当の永平寺町の町議の方も来ていらっしゃいますけれども、この泰遠寺山から古墳が出て、いまの松岡の公園に移動しているということを、私は子どものときに体験しております。いまの変電所のところは、ちょっと聞いたことがないです。

○司会 時間も押しておりますが、あと一つ、二つありましたら、いかがでしょうか。

○フロア3 今日は素晴らしい九頭竜に関するお話を、本当に感謝をしております。

私は芝原荘というところに住む住民の一人ですが、いわゆる芝原から、いまから四百何十年前、結城秀康が福井に移住してきたときに、芝原上水を引いたということで、この水は福井市民はもとより住民の命を守っていき、灌漑用水にもなり、城を守る用水にもなったということで、多目的用水として認識をしているのですが。

四〇年前に「芝原を美しくする会」という住民運動を、福井市12の公民館単位が住民運動を続け、今年四〇年になりました。そんなことで記録もつくったわけであります。

このようなお話を聞いて、体系的に母なる川、九頭竜をどのように水源として、あるいは住民として認識していくかということについて、非常に素晴らしい流れができたと私は感謝しているところでございます。

わが福井県、特に嶺北は越の三川を、防災と景観を中心にしながら、日本に冠たる防災、景観の地域をつくっていく目標を、芝原を美しくする会が持っているわけでありますが、そんなことと併せて、この県立大学で行われますシンポジウムというか、九頭竜川探求の旅が大きくつながっていくことを確信している一人でございます。感謝の気持ちで申し上げました。

○司会 どうもありがとうございます。ただいまのコメントに応えるかたちで、北條蓮英先生からまとめをいただきたいと思います。北條先生よろしくお願ひします。

## まとめ

福井県立大学 看護福祉学部  
北條 蓮英 氏

ただいまご紹介いただきました北條でございます。

教室の音響がちょっと悪くて、聞きづらいところがあったと思います。時間も過ぎて皆さんお疲れのところ、もう少しだけお付き合いいただきたいと思います。

### はじめに（スライド1）

まとめということですが、ちょっとできかねますので、スライドではタイトルを「まとめに代えて」としています。といいますのも、私は「ほうじょう」で、短く言いますと「ほじょ」ですね。補助という仕事をします。私の所属の社会福祉の仕事は補助が大切ですから。

今日は、「九頭竜川プロジェクトの今後の展開」について、少しほらを吹きます。

### コンパクトでインパクト（スライド2）

今日の特別講演会は、九頭竜川について、「つながり」をキーワードに、生態系のシンボルであるサクラマス、それに、歴史学、民俗学という学問の蓄積をご披露いただきました。大変興味深いお話をしました。

30分しか取れないというところが惜しいです。2時間の中で、どう取めるか。つまり、コンパクトでインパクトになったと思います。どこかの新聞のキャッチにありますけれども。キックオフということですので、全部出さない方がいいんです、こういうときは。ちょっと言い過ぎましたが。

### 講師陣は「他力本願」ではないか（スライド3）

しかし、今日の講師陣は県大以外の方ばかりじゃないかというご批判があります。これを称して他力本願と言うわけです。この言い方は世間的にはいいのですが、真宗学的にはちょっと問題があります。なぜか。他力とは、「not 他人の力、but 仏の力」ですね。だから、他人の力を称して他力本願と言ってはいけない。仏の力を言っているわけです。

しかし、今回の企画に対して、講師の方は非常にご無理を聞いていただきました。まさに私は慈悲の心を感じました。この点で今回、他力本願と言っても間違いではないと確信するわけです。

そして、講師の皆さんのはかに、こうして土曜日の午前の出にくいところをご参加いただいた皆さんに感謝を致すわけです。

### 九頭竜川流域の特性

#### (1) 古九頭竜湖湾（スライド4）

さて、スライドは九頭竜川流域の地質形成史をみたものです。300万年前から1万年前を洪積世、私が習ったときには洪積世と習ったのですが、最近の学問では更新世というそうですね。1万年前、氷河期です。

この図の上は更新世後期の坂井、福井平野です。下の図は氷河期から沖積世（完新世）に入って、ちょうど1万年前から現在までです。その後期は、もう陸地になっています。つまり、その昔、坂井平野は、古九頭竜湖湾という海だったのです。つまり、ここは海だったということを、まず認識しておく必要があります。

## (2) 県土の7割を占める流域（スライド5）

九頭竜川の源は、岐阜県境の油坂峠です。ここは、標高は717メートル、白山三の峰は2,700メートルぐらいあります。国交省の資料では、九頭竜川流域は2000メートル以下の山地と書かれています。そこはもう少し尾根とかの高さを押さえないといけないのですが。それはともかくとして。このエリアというのは岐阜県の一部、昔の石徹白村で、いまは郡上市です。この流域は福井県全体の70%を占めています。

## 九頭竜川の特性

### (1) 勾配が急（スライド6）

先ほどもお話をありましたけれども、九頭竜川はたいへん勾配が急です。これは、世界の川と比べても日本の川は全体が急流です。とりわけ九頭竜は淀川、利根川、信濃川に比べても河川の長さが短くて、勾配がきついということです。

### (2) 約500年前の九頭竜川流路（スライド7）

先ほどは1万年ほど前の話をしましたが、千年前とか五百年前のころの九頭竜の形はどうかということを示したもので、流路がこのようにぐじやぐじやになっている。自然のままの形ということです。

## 〈九頭竜川〉にこだわる、もうひとつの理由（スライド8）

100年前、九頭竜川の明治の改修があります。そして数十年前、いまから40年前ですが、私どものいる大学の周辺を五領ヶ島と言いますけれど、ここは、このように両方、こっちが本川で、こっちが裏川といわれました。輪中だったので、しおちゅう洪水がありました。先輩方は、この裏川を閉じようと考えたわけです。1960年から68年にかけて、この改修をしたわけです。

したがって、県大のルーツは川です。川の底であった。そして「21世紀、県大は、変わる（=川ル）」ですね。生まれ変わります。九頭竜川プロジェクトにより変わるということです。

## QZP（九頭竜川プロジェクト）の関心領域（スライド9）

さて、九頭竜川プロジェクトは何に関心があるのかということですが、何かに特化はしていないのです。何にでもつながります。今日の講演の生態系、歴史学、民俗学、そして文学、宗教文化、気候、風土、自然環境。福井の人たちは我慢強いとか、いろいろ言われるのですけれども、そういうことなんかも気候、風土の関係で見ていく必要があるのではないかでしょうか。

そして、流域の形成史ですね。やはり昔は海だった。そこに恐竜とか、東尋坊でみられる柱状節理という珍しい地質があるわけです。そして、母なる川があつて、そこは洪水がおこる。そして、それを治水する。繼体天皇から始まる治水の歴史。そして、それを農業用水として使うという用水、これは千年の歴史があります。

千年の歴史と言いますと、平安時代ですね。いま、私たちが3.11で気付かされたのは、近代以降の科学で、地震学も建築構造学もここ100年の学問です。地震学では、さらにもっと昔、つまり千年を見通す必要があるということで、いわゆる考古学との連携を始めているようです。

十郷用水は1110年にできています。現在も、これは現役で働いています。わが九頭竜川流域は、千年の営みの上に、共生しているのです。しかし今後、このままでいけるかと言うと、やはり絶対安全はないわけです。

そして、農業の問題。ちょっと先へ進めます。

もともとここでは織維産業とか、川の交通、社会基盤として、住民が暮らす生活、そして流域の特性。特に私は、ほかの流域との比較も大事と考えます。四万十川とか信濃川とか、さまざまなかころとの比較ということも見ておきたい。

## Q Z P の視点（スライド 10）

九頭竜川プロジェクトの視点は、次の 5 点。まず第 1 に、分野横断でないとできません。人文、社会、自然科学と、これは学長が先ほどおっしゃったとおりです。次にそれから連携しないとできません。私は「れんえい（蓮英）」といいますが、連携しないとできませんよね。実践との連携や行政、住民、さまざまな民間企業の方や在野の研究者の方、既存学会にとらわれない連携がります。

そしてじっと枠の中に閉じこもっているのではなくて、発信をしなければいけません。この発信がなかなか上手にいかないのですけれども、できれば自主型研究会を立ち上げるとか、あるいは独自性のある研究をやっていく。

第 4 に持続性。何を置いても、やっぱり石の上にも 3 年ですね。これは毎年、定期的に開催する。そして第 5 は、開放性。参加の自由。そして、それを発信するためには、このような講演会。さらにディスカッションが加わるとすればシンポジウム。そして、さらに参加型としてワークショップとか、現地の見学会ということもしていきたいと思います。

## 本学の役割（イメージ）（スライド 11）

本学の役割は、支援と結節で、結び付ける機能あります。いま言いました連携、開放、持続、発信、分野横断という視点から本学は支援・結節点を担うわけです。

## 今後の展開の方向性（イメージ）（スライド 12）

今後の展開の方向性のイメージを言いますと、第 1 段階は、今日のキックオフです。今回は、時間の制約とか、学内で開催したことによる足の制約、あるいは、大学祭と併設など、さまざまな制約がありました。

第 2 段階は、プレゼンテーションをより多くするとか、あるいは足場を福井市内、駅周辺で開くとか、あるいは、もう少し時期を変えるとか。そして、1 日イベントで、1 日デーにしたいということとか、さらに第 3 段階として、自主参加研究の立ち上げです。第 3 と書いておりますけれども、第 2 段階と同時にやるぐらいのことと、問題意識を共有されている方の中で研究会もする。

この先については、配布資料集には記載ありませんが、スライドに書きました「九頭竜川とその流域に関する学問の構築、仮称、九頭竜川学、この「川」を入れるかどうかはありますが、仮称です。これは冒頭の学長の話にありましたけれども、なぜ九頭竜川なのか。なぜそういうローカルな問題かということに対しては、やはり今日グローバル化すればするほど自分のローカルに着眼する。立脚して見つめる。それが「ふるさと」という言葉に代表されます。あるいは、ふるさとのアイデンティティー、愛着をしっかりと持っていないと、グローバリゼーションを進めたときに、それはコスモスのなかに消えてしまうのではないかということです。

## Q Z P の今後の展開について、研究会イメージ例（スライド 13）

例えば、研究会を立ち上げると言ったけれど、何をするかということですが、先ほどのいろんな学問の領域を、ここにざっと挙げてみました。これ以外にももっとたくさんますけれども。

今日はサクラマスと歴史学、民俗学。民俗学でも、先ほど津村先生がおっしゃったように、ごく一部しか取り上げていません。伝統文化、お祭りとか風習とか、まだいっぱいあります。

研究会ということになりますと、分かりやすくて、つながりがイメージしやすいという意味で、例えばサクラマスで挙げてみると、資料集にあげているように、これぐらい広がりがあるのです。生態系、生き物、植物、水理学とか、あるいは、森・川・海のつながりとか、海洋学、森林学、治水、利水、水生植物とか、アラレガコ、その他があるので、こういう領域で研究会を立ち上げるというのは、皆さん、どうでしょうか。ぜひ、何らかの関わりで、こういう研究会を立ち上げてはど

うかと申し上げます。

#### おわりに（スライド 14）

最後に、Q Z Pは、九頭竜川プロジェクトの略称です。まだ卵の段階です。サクラマスではないが、450°Cの積算温度にならないとふ化しません。これから、どう育てていくか。これから寒くなりますが、ちょっと時間がかかります。しかし、サクラマス同様、今後、学内、学外の皆さまのお力添えをいただきたいと思います。

どうもありがとうございました。

#### ○司会

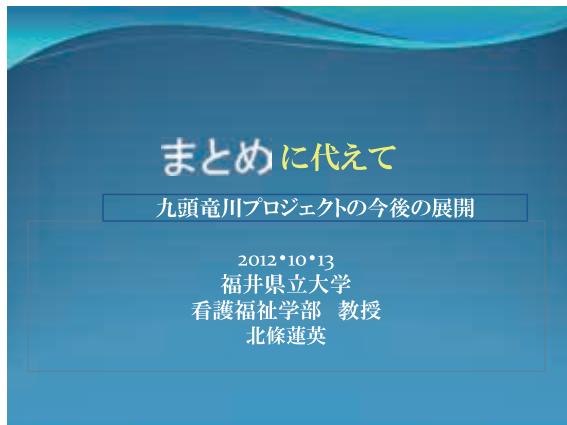
当初の予定より時間が大変ずれ込んでしまい申し訳ございませんでした。以上をもちまして、福井県立大学 20 周年記念特別講演会「九頭竜会探究の旅」を閉会いたします。

添付資料にありますアンケートにご協力をよろしくお願いします。アンケートは会場を出たところに回収箱を設置しておりますので、そちらにご提出ください。

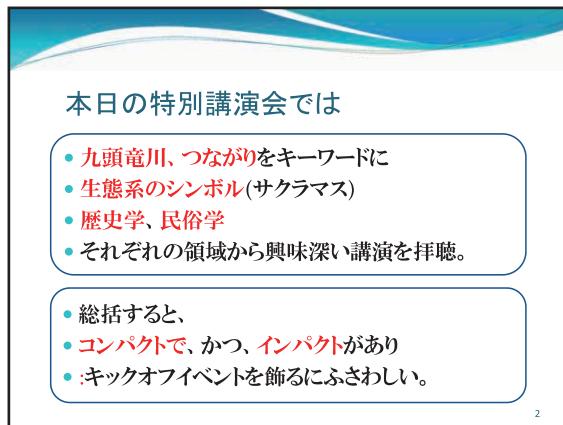
最後までお付き合いいただき、どうもありがとうございました。

## まとめ スライド資料

スライド 1

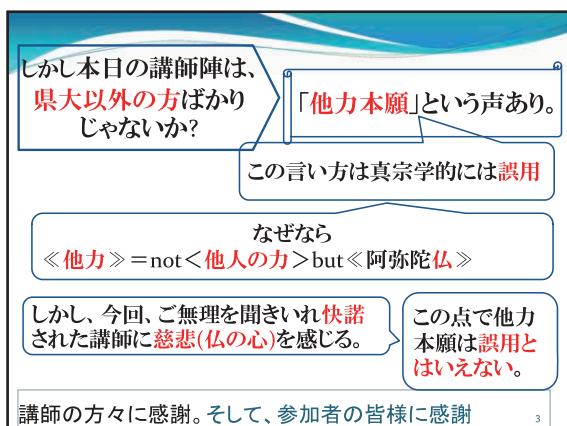


スライド 2

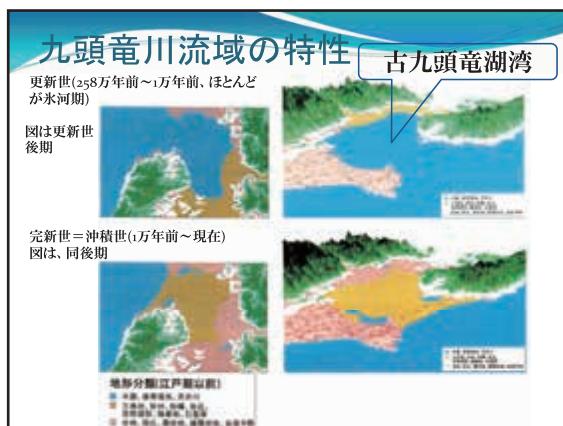


2

スライド 3



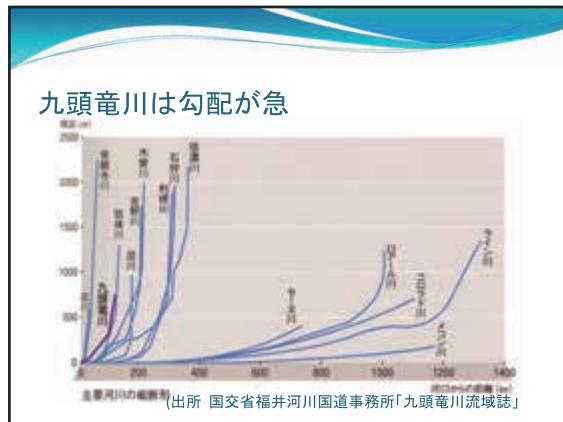
スライド 4



スライド 5



スライド 6



スライド 7



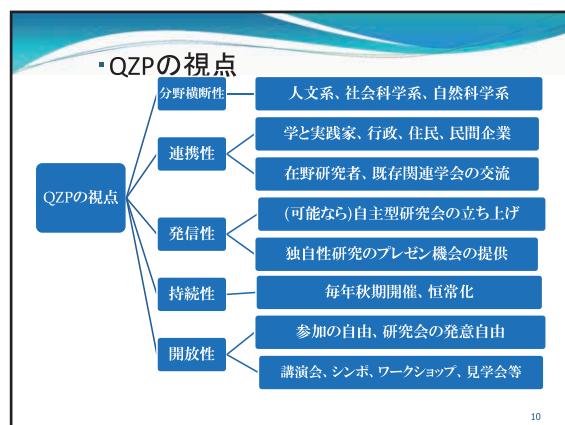
スライド 8



スライド 9



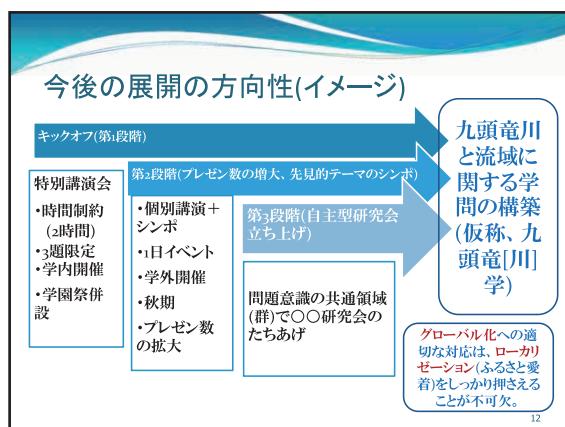
スライド 10



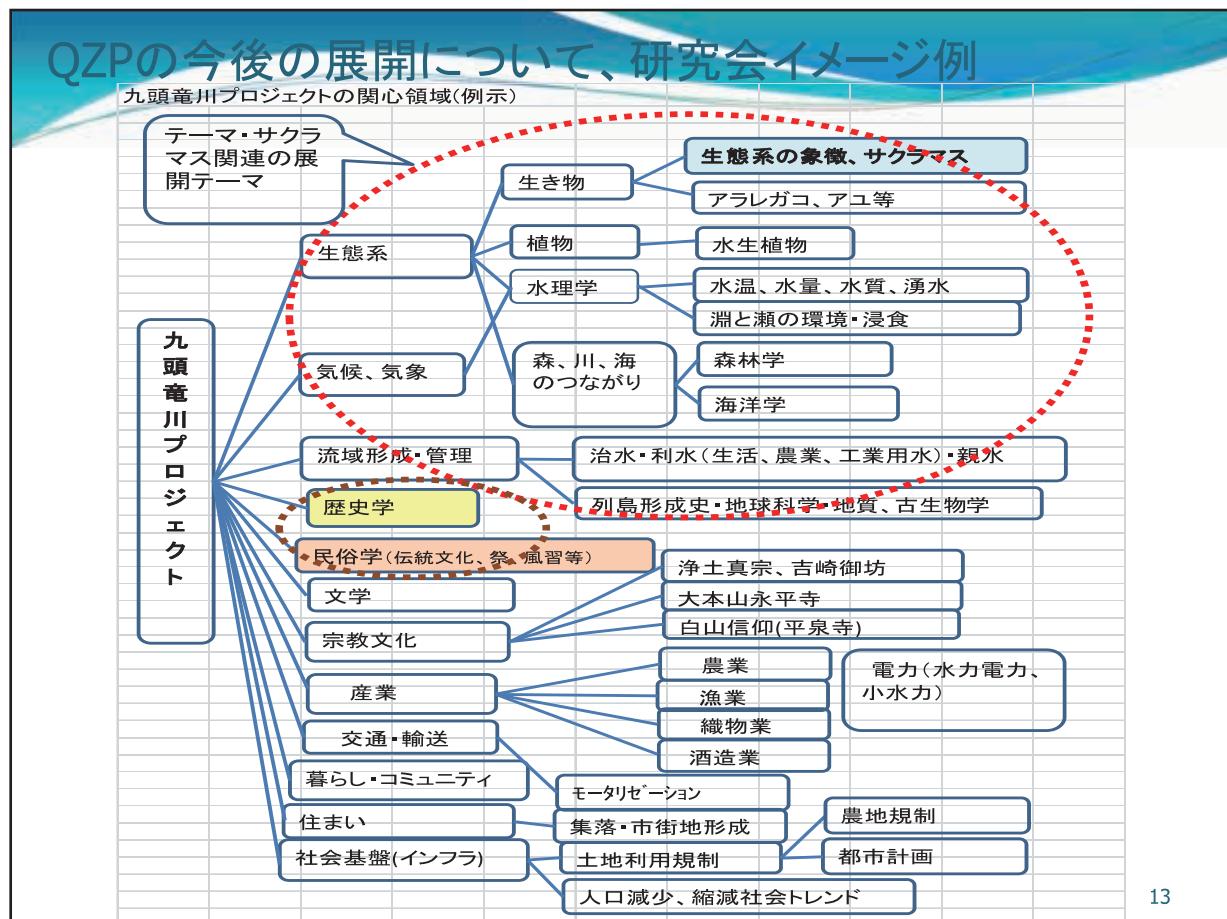
スライド 11



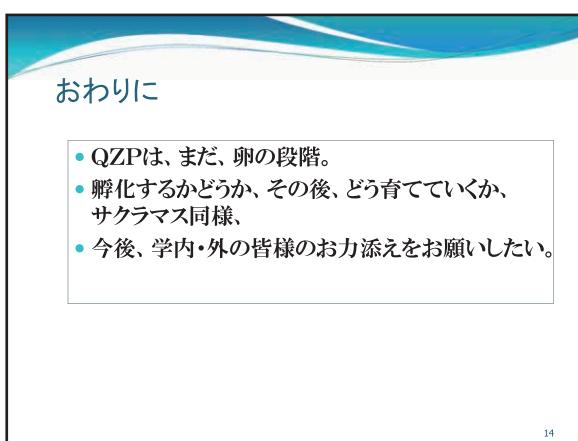
スライド 12



## スライド 13



## スライド 14



## スライド 15

